幼兒の夏の病氣

醫學博士　青木醇一

小兒の病氣は季節によつて著しく異るが殊に夏と冬はその相異が著しい。幼少な小兒の病氣の大半は急性の呼吸器系の病氣と消化器系の病氣であるが、呼吸器系の病氣はおもに寒冷の季節に流行する、そして氣候が溫暖になるにつれて追々少くなり夏になると殆んどその影を潜めるやうになる然るに消化器系の病氣は寒い季節には極く少いが初夏の頃から盛夏にかけて日毎に多くなつて行くそして秋冷を感ずるやうになると急に少くなる。かやうに幼兒は氣候の影響を受け易いから、幼兒の健康上にはその季節によくそれぞれ適當な注意が必要である　梅雨の頃から炎夏の候にかけては幼兒の病氣の最も多い季節である。殊に疫痢や消化不良症のやうな幼兒にとつて極めて恐るべき病氣は殆んどこの季節にのみ流行する。昨今のやうに炎熱がつゞくと疫痢や消化不良症で斃れる幼兒が日毎に增してくる。幼兒をもつ家庭では十分警戒しなければならない。

一般に幼兒の病氣は急激なものであるが、殊に夏の病氣は發病が急激である、そして又經過も速く危險なものが多い。それ故醫師の治療を受けるまでに家庭で應急の手當をしておかねばならぬことが多い。それで幼兒の急性病に就ては是非家庭でその發病時の容態と應急の手當とを心得ておく

必要がある。以下幼兒の夏の病氣に就て少しく述べて見たい。

疫痢

疫痢と云ふ病氣は今日のところ未だその本態が明瞭でない。傳染病規則ではこれを一種の法定傳染病として取扱ふことにしてゐるが、果して特殊の病原菌によつて起る獨立の疾患であるかどうかに對しても隨分疑をもつ人が少くない。一部の人は疫痢は幼兒に來る急激な赤痢であると稱へてゐるが、これも必ずしも確かとは云へない。尤も一家族内で兄弟が同時に發病して一人は定型的の赤痢であり、他の一人は疫痢であると云ふやうな例も折々ある。又細菌學的檢査の結果、所謂疫痢患者から赤痢菌の證明される例も少くない。これ等の事實は疫痢は赤痢の一種であるとの論者の有力な證據とするところである。しかし疫痢と云ふ病氣は單に臨床上からのみ診斷される病氣で、チフスや赤痢のやうに細菌學的又血清學的に確乎たる診斷を下すことが出來ないから隨分その診斷の不確なことが少くない。それで極く急激な赤痢を疫痢と診斷した場合、その患者から赤痢菌が證明されたとき所謂疫痢患者からも赤痢菌が證明されると云ふ結果になるのである。かやうな譯で所謂疫痢と思はれる患者から赤痢菌が證明されたからとて直ちに疫痢は赤痢の一異型に過ぎないと結論するのは無理である。しかして實際に疫痢の症狀と赤痢の症狀とは全々異るのみならず、一般に疫痢患者からは赤痢菌を證明することが出來ないので疫痢は赤痢とは全く別な疾患であると論ずる人が少くない。何れにせよ今日のところ疫痢の病原體は不明であると見るのが穩當であらう。

病原體が全々不明であるとすれば、その眞の原

因も不明と云はねばならぬ。しかし經驗上疫痢をおこすには種々の條件や誘因のあることは知られてゐる。第一に氣候である。統計上疫痢の最も多い季節は七月である。次で六月及八月であつて冬季には極めて少い。第二に小兒の年齡である。最も多く疫痢のおこる年齡は三歲から七歲までであるが、殊に四歲五歲の幼兒に多い。乳兒には疫痢を見ることは全くない。又八、九歲以後の兒童には極めて少い。第三に小兒の體質である經驗上疫痢と云ふ病氣は特にある體質の小兒が罹り易いやうである。それは一度疫痢に罹つて幸に治癒した小兒が二度も三度も類似の病氣に罹ることが少くないことや、兄弟が時を異にして二人も三人も時には四人も疫痢で斃れる家庭が屢ば見られるところから何となしに疫痢はある特別の體質の小兒が罹り易いのではないかと考へられる、これに對して小兒には胸腺淋巴性體質と稱へて特に毒素や刺戟に對して過敏な、そして抵抗力の弱い體質があるが、この體質の小兒が疫痢に罹り易いのだと云ふ說が從來屢ば稱へられた。しかしこれとて何等確證はないのである。第四は食物である。食物の不攝生は直接疫痢の誘因となることが多いやうである。實際に不消化なものを食べたり、食べ過ぎをしたりした後に疫痢になることが決して少くない。又不良の果物によることも多いやうである。例へば枇杷や櫻實を澤山食べたり、不良なバナナを食べた後などにおこる例は屢ば見聞するところである。第五に暑熱である。夏の炎天に永くさらされて後發病することがある。第六に腹部の冷却が誘因にあると云はれてゐる。寢冷えをして腹部を冷却したことが疫痢の誘因になることがあると云はれてゐる。しかし果して寢冷え位が疫痢を起す誘因になるかどうか多少の疑問なきを得ないと思ふ。又稀に海水浴の後に疫痢になることがある

これも腹部の冷却が關係するだらうと云ふ人があるが、この際はむしろ不潔な海水を多量に飲むことが更に重要な誘因をなすものではあるまいか。

次に疫痢の症狀を簡單に述べやう。名古屋地方では早くより之を早手又は颶風病と呼び、熊本地方では急症と呼んでゐる。これによつても如何に疫痢の發病が急激であつてその經過の迅速であるかゞ窺はれる。通常これまで別に變つたこともなく元氣で遊んでゐた幼兒が急に元氣がなくなり高熱を發してくる、尤も疫痢でも時には餘り熱のないこともあるが多くは三九度以上四〇度位になる次で吐いたり下痢したりすることが多い。下痢は通常初めは不消化物位で大して惡い便だとも思はれないが、後には粘液や膿樣のものの混じた惡臭のある便に變つてくる。下痢の回數は一日四五回位のもので餘り多くない。赤痢の時は下痢の回數は極めて多く、少くも一日十回以上時には數十回に及ぶことが少くない。これは赤痢と疫痢の症狀の異つた點の一つである。その內顏色は蒼ざめ口唇の色は惡くなり眼つきはどんよりして來て全く氣力がなくなつてくる、脈を觸れて見ると小さく弱くそして非常に早くなつてゐる、通常一五〇以上一八〇位にもなつてゐる。かやうにして半日か一日の後には精神は朦朧として意識を失ひ遂には全く昏睡狀態に陷ることが多い。又これと同時に激しい痙攣を起してくることが少くない。かやうに疫痢では急激に心臟と腦とが犯されるので速い時は一晝夜以內に斃れることがある。一般に死亡率が極めて多く九〇パーセントにも及ぶと云はれてゐる。

かやうに疫痢は極めて急激に發病し僅かの間に症狀が險惡になるから、一刻も早く手當をしなければならぬ。從つて醫師の診察を待つことの出來

ぬ場合が決して少くない。それ故幼兒をもつ家庭では疫痢の症狀をよく心得ておき疑はしい時は直ちに應急の手當を講ずるがよい。疫痢の手當としては最も大切なことは極く初期に十分腸の內容を排徐することである。腸內に腐敗した食物や有毒物質が存在するとき、これが體內に吸收せられて激しい中毒症狀を起すべきことは容易に想像されるからである。腸內容を排徐するに最もよい方法は下劑として蓖麻子油を用ひることである。通常幼兒に對して一回量一五瓦乃至二五瓦も與へればこれによつて二、三時間もしくは五、六時間後には大體腸內を一掃することが出來る。次に腸內容を排除するために腸の洗滌も大切であるが、これは多少の技術を要するから全く無經驗の人には一寸困難である。之に反して蓖麻子油を與へることは最も簡單で而も有効であるから疫痢の疑の時は先づ醫師の來る前に與へておくがよい。

蓖麻子油は小兒に用ひられる下劑の中で極く安全で又有効なところから近頃一般家庭でも廣く用ひられるやうになつた。しかし同時に又甚しく亂用される傾向が多いから一言その用ひ方に對する注意をこゝに述べておきたい。蓖麻子油は通常胃に於ては殆んど變化しない、從つて胃を刺戟することは先づない。小腸に移行して後一部は腸液によつて蓖麻子油酸グリセリンとに分解されるのであるが、この蓖麻子油酸は腸粘膜に對して極めて輕微な刺戟を與へその蠕動を亢進させ、そして緩下作用を惹き起すのである。しかして此際腸粘膜に加答兒を起させるやうな事は通常ない。又蓖麻子油の分解されない部分は機械的に腸內容の排泄を促す助けとなるものである。かやうにして蓖麻子油は小兒用ひる下劑として早速に腸內容を一掃せんとする場合には最も安全なものである。しかし如何に刺戟の少い下劑であるとは云へ、無暗に

之は亂用することは避けなければならぬ、又餘り反覆して用ひれば有害なることは云ふまでもない實際蓖麻子油の反覆使用によつて却つて嘔吐を增し、食欲の抗進を阻止し、榮養を惡しくして患兒を著しく衰弱させることがある。それ故蓖麻油は疫痢や赤痢の極く初期に一刻も速く腸內容を排除する必要のあると思はれる時に、一回もしくは二回位用ひるがよい。それ以上反復用ひることは避けたがよい。又熱があつたなら直ぐ蓖麻子油などと云つて發熱の際いつでも用ひる人があるが、これらは正しく亂用であつて愼しまねばならぬ。なほ蓖麻子油はとかく飲み惡いこと服用後時として嘔吐を起させる缺點がある。しかし發病の初期に一二回與へることは左程困難ではない。番茶などに浮かして與へてもよいがそのまゝでも小兒によつては樂に飲む。又急性消化不良症や疫痢の初期には著しく渴を感ずるから番茶などゝ同時に與へれば喜んでのむことも少くない。又神經性の小兒で服用を拒むやうな時には「此藥は飲み惡いが我慢して飲むやうに」などゝ云ふ言葉を用ひずに眞面目な態度で「この藥を飲まなければ病氣が治らぬから」と云つて與へれば幼兒と雖もよく之を理解して飲むものである。次に蓖麻子油服用後によく嘔吐することがある。これはおもにその不快なる臭氣によるものである。胃に停滯してゐた不消化物が嘔吐されるとすれば之は決して忌むべきことでなく、時には却つて胃內容を一掃することによつてよいのである。

とに角疫痢の初期には蓖麻子油を一二回丈與へて腸內容の一掃をはかるやうにするがよい。その他熱が高いやうなら頭部を氷枕氷囊で冷し、足部か冷えてゐる時は湯タンポなどで溫めるがよい。又湯を訴へる時は番茶など適宜に與へて之を醫する必要がある。かやうにしておいて一刻も早く醫

師の治療を乞ふやうにすべきである。

幼兒の消化不良症

疫痢のやうに死亡率は多くないが夏季には幼兒に最も多い病氣である。梅雨期から初秋までとかく人の身體は暑氣のために組織は弛み、機能は鈍つてくる。殊に小兒の胃腸は著しくその機能が衰へ消化力は減退してくるものである。從つて平素と同じやうな食事をしてゐても時にはそれが食べ過ぎをしたり不消化物を食べたのと同じ結果になることがある、ましてや食事の不攝生のあつた後など容易に胃腸を害して嘔吐や不劑を起すことが少くない譯である。それに夏は細菌の繁殖が速いから食物などとかく腐敗し易い、大丈夫だと思つて幼兒に與へた食物が實は既に腐敗に近く、それがために急に胃腸障害をおこすことがある。

消化不良症の症狀は色々である、極く輕いこと

もあり又非常に重いこともある。輕症の時は下劑が三四回もあつて、元氣がなくなり食慾が減る位の程度でこれは二三日も食物を攝しておけば容易に治る。しかしこれを構はず捨てゝおけば次第に下劑も增し熱も出て重くなつてくる。重いものになると嘔吐や嘔氣が激しくそのため食慾は全くなくなつてくる。そしてひどく渴くやうになる。身體は非常に疲れ、その置きどころもないと云ふ樣子をして手足を投げ出したりするやうになる。顏貌はぼんやりして眼に生き生きしたところがなくなつてくる。そして終日ウトウト眠り込むやうになる。時折眼を覺ましたかと思ふと又すぐ眠つて了ふ、つまり著しく嗜眠狀態になる。體溫も大抵高く三十八度又は三十九度位になる。脈は大層速く一四〇から一六〇位になる。體溫の割よりは脈の著しく多いのが此の病氣の特徵である。かやうな狀態になつたものを通常消化不良性昏睡と呼ん

で居る。

かやうに嗜眠狀態になるものは症狀が重いのであるから早く醫師の診察を乞はなければならぬ。しかし醫師の治療よりは家庭の注意は更に大切である。すべて消化不良症の初めには食物をあまり與へないでおくがよい。むしろ一晝夜位絶食させるがよい。絶食してゐる間に小兒の疲れ果てた胃腸は十分休養することが出來、從つて早くその機能を快復することが出來る。それで一晝夜位の絶食後は大抵體溫も降り、幼兒の意識もはつきりして來て元氣が出てくるものである。食物は攝しなければならないが、渴を訴へる時には適當に水分を與へることが必要である。嘔吐や嘔氣の多い時は渴を醫するには冷やし番茶など極く小量づつ與へておくがよい。微溫湯は却つて嘔吐にはよくない。初めは十分食物を攝しなければならないが、輕快してくるにつれて重湯、牛乳、果汁、野菜スープ等適宜に與へ早く榮養を恢復させるやうに努めなければならぬ。これ等の點に就てはよく醫師の指圖に從ふがよい。

藤の實

藤の實が目につくようになつた。

やはらかく生ひ茂つた藤の葉のかげが濃くなつたと思ふ中にもうあんなに實がのびて來た。

どうして落ちたものか、五六寸ばかりの實一つ、砂まぢりの地べたに落ちてゐるのを見つけてから後の藤棚のまはりは一しきり大變なさはぎ。

幸ひに手の届くかぎりではなく、自分達の小さい椅子に乘つたつて、棒で突つついたつて容易にとれそうもないので數は減りもしない、

小さい組の子二人ばかり「もうおはいり」と云へば殘り惜しげに見かへりつゝも室へとはいつて行く。大きい組の五六人はどうして、どうして、たう〳〵先生を引ぱつて一つ我がものとせではやまぬと云つた勢で先生をせびつて居る。先生が椅子に乘つて、ありつたけせいのびをしてやつと落した一つを誰の物とする迄にかなり長い間かゝつてゐるようだ。丁度これが眞正面に見える室に居るので帽子もかぶつてバスケットもさげて歸るばかりで居ながらこの樣子が何だか面白くていつ迄も見て居た。

（よし子）